

---

# イタリアからの復讐者

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イタリアからの復讐者

### 【Zコード】

N1465E

### 【作者名】

ヨーリ

### 【あらすじ】

かつてコナン達少年探偵団が逮捕した、イタリアの強盗団。今、そのリーダーであるカパネと仲間達が、探偵団への恨みを晴らすべく日本に来日し、コナンを誘拐する。そして、徐々に明らかとなる彼らの真の目的・・・果たして、コナンの運命は・・・？

(前書き)

この小説は口×哀のカップリングです。  
その事に対する苦情は受けつけませんので、『ア』承ください。

鳥矢町の一角に、1軒の家があった。

その家の中に、5人の男女がいる。

「うまくいったな。」

「ああ、こんなにもうまくいくとは思わなかつたぞ。」

「で、どうするのボス?」この子。

「フフフ……コイツは人質だ。オレ達が大金を手にするためのな。」

そう言つと、男は床に転がつてゐる子供を見つめた。

「ん~、ん~……」

子供はジタバタともがいてゐる。

子供の名前は、江戸川コナン。

「うう・・・

「コナンは、イタリアの強盗団に誘拐されてしまったのだ・・・

それは、ある日の朝の事である。

「ナンはこつものよう」、帝丹小学校に登校する途中だった。

「ハア・・・昨日徹夜で小説読んでたから、すっかり遅くなっちゃつたよ・・・」

「ナンは軽快に走っていた。

「早くしねえと、遅刻するな・・・」

そう思つた「ナンは、速度を上げる。

その時、路地から飛び出して来た女にぶつかってしまった。

ドカッ！

「うわっ！――

「キヤツ！――

「ナンは地面に倒れた。

「イタタ・・・すいません！急いでいたので・・・」

「いえ、じぢりじぞ前をよく見ていなかつたので・・・ん？」

女は、「ナンの事をジッと見つめた。

「・・・」

「な、何ですか？」

コナンが聞く。

女は口を開いた。

「その顔、どこかで見たと思ったら・・・少年探偵団の江戸川コナン君ね？」

「え？」

「イタリアの強盗団の事件、君が解決したんでしょう？知ってるわよ。私、その事件の容疑者の関係者だもの・・・」

「！！」

女の声に、コナンはビクッとなつた。

「（イタリア強盗団の事件の関係者！？ま、まさかこの女、アイツらの仲間なのか？）

コナンはその場を離れよつとしたが、女に右手をつかまれた。

ガツ！

「え？」

「逃がさないわよ、ボウヤ。」

そう言つと、女は「ナンを羽交い締めにした。

「な、何す・・・うつー!」

コナンが叫ぼうとしたその時、口をハンカチで覆われた。

「アーティスト」

カツハジタバタともがいたが、やがて皿がトロンとなりた。

ג' עי' . . .

女が手を放すと、コナンは地面に倒れ込んだ。

ドサツ

「ウフフ・・・」

女はコナンを抱え上げると、少し先に止めてあつた車の前まで歩いて行つた。

「標的を捕まえたわ。開けて。」  
ターゲット

女が言うと、車の後部座席が開けられた。

中にいたのは、三角メガネをした男。

そう、イタリアの強盗団の一人だつた。

女は「ナンを抱えたまま、車の後部座席に乗り込む。

車のそのまま、何事もなかつたかのように走り出した。

## 帝丹小学校

帝丹小学校では、小林先生が出席を取り、授業が始まひとつとしていた。

「授業を始める前に、皆さんにお知らせがあります。ナン君は今日はカゼでお休みです。先ほど毛利小五郎さんから電話がありました。」

澄子のお知らせが終わり、授業は始まった。

「コナン君、今田はカゼで休みなんだ。」

「カゼなら、しうがないよな。」

歩美と元太が口々に囁く。

そんな中、哀が口を開いた。

「それはおかしいわね。」

「え？ どういう意味ですか、灰原さん？」

光彦が哀に聞く。

「私、朝探偵バッジで江戸川君と話したけど、彼、『遅れそうだけど必ず学校には行くよ』って言つてたわよ。」

「え！」

「それって・・・」

「どうこう事ですか・・・？」

「とにかく、1時間目が終わったら小林先生連れて毛利探偵事務所に行きましょう。」

その頃、コナンは薄暗い部屋の中で目を覚まそうとしていた。

「ん・・・」などだ？

コナンは辺りを見回そうとしたが、それはムリだった。

なぜなら、彼の視界は何かで塞がっていたからだ。

「クソッ、目が何かで塞がってる。これじゃ何も見えない・・・」

その時、どこからか声が聞こえて来た。

「おつと、田が覚めてたようですぜ、ボス。」

「そのようだな。」

「…」

コナンが振り向くと、彼の目を塞いでいた物が取られた。

パサッ！

「…・・・

コナンの目に映っていたのは、イタリアの強盗団の3人と2人の男女だった。

そこでようやく、コナンは自分の手足が縄で縛られている事に気づいた。

「うつ、ぐつ・・・」

コナンは体を動かしたが、一向に縄は解けない。

「よウ、ボウズ。ワシの子分共がお世話になつたらしいな。」

「アンタ、誰だ？」

「私が？私はディノ・カパネ。イタリアの強盗団のボスだ。」

「ボクを誘拐してどうする気?」

コナンはカパネをにらみつけた。

「君を誘拐したのは、金を手に入れるためだ。母国に戻る資金を稼ぐためのな。」

「逃亡」資金つてワケ?」

「理解が早いな、少年。その通りだよ。」

カパネは不敵に笑う。

「ねえ。」

コナンはカパネに話しかけた。

「何だ、少年?」

「お願い、ボクを解放して!」

「何?」

「こんな事してもムダだよ!ボクの仲間は優秀なんだ!すぐにボクを見つけ、オマエ達を捕まえてくれる!今からでも遅くない!こんな行為はもう止めて!…」

「つるさい少年だな。おい、デルタ。その子の口を塞げ。」

「はい。」

デルタと呼ばれた三角メガネの男はガムテープをビックと切ると、口ナンの背後に回った。

「一。」

「少し黙つてろ。」

「や、止めて！ムググツ・・・・」

口ナンは口にガムテープを貼られてしまった。

「ん~、ん~！~！」

口ナンは叫んだ。

「これで良し。フイー、その子から携帯を奪え。」

フイーと呼ばれた丸メガネの男は、口ナンのランドセルから携帯電話を取り出した。

「んつ、んんつ！~！」

口ナンは首を横に振つて必死に叫んだが、ガムテープのせいで声にならない。

「フイー、電話を貸せ。」

カパネはフイーから携帯を受け取ると、毛利探偵事務所の番号を調べ始めた。

「ナンはカパネが電話をかけよつとするのをただ見ている事しかできなかつた。

同じ頃・・・

1時間目の授業終了後、哀達は小林先生を連れて毛利探偵事務所にやつて来ていた。

ピンポーン・・・

哀が呼び鈴を鳴らすと、小五郎が降りて來た。

「お、哀君・・・」

「おじさん、ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・」

「わかつてゐる。ナンの事だらう?」

「えー? そ、それじゃ、江戸川君は・・・」

「ああ・・・何者かに誘拐されてしまつたらしく。」

「ええ・・・そんな・・・」

歩美達の顔が曇る。

「でも、どうしてわかつたの?」

「実は、コナンが出てすぐにオレがお弁当箱を渡し忘れてたのを思い出してな。届けようと思つて事務所を出たんだが、しばらく走った後コナンのクツが片方落ちてるのを見つけてな。これは何があると思つて、事務所に帰つた後学校に休みの電話をかけたんだ。その30分後に案の定かかってきたんだよ、脅迫電話がな。」

「電話の主は何て？」

「『江戸川コナンを誘拐した。無事に返して欲しければムダな行動は取らない事だ。1時間後にまたかける』と言つていた。」

「やう・・・

「コナン君・・・

「そろそろかかるてる頃だぞ。」

「おじさん、私に会話をさせてくれない？」

「わかつた、できるだけ会話を引き延ばすんだぞ。」

小五郎が言い終わると、電話がかかってきた。

プルル、プルル・・・

哀は電話を取つた。

「はい、もしもし。」

「何だ、ガキじゃねえか。」

「ガキで悪かったわね。あなた達が誘拐犯といつ名の不届き者かしら？」

「随分強気な小娘だな。その通りだ。」

「あなた達の要求は何？」

「オレ達の要求は、身代金だ。人質のガキを助けたければ、2億円用意しろ。」

「に、2億円？」

歩美達の顔に緊張が走った。

「・・・わかったわ。お金は何とか用意させる。その代わり、江戸川君の声を聞かせて。」

「オマエ、このガキの彼女が何かか？」

「なつー?ま、まあ、似たようなものよ。み。」

哀は少し赤面しながら言った。

「良いだろう、声を聞かせてやる。」

カパネはコナンを引き寄せる、口のガムテープをはがし電話を耳元に当てた。

「は、灰原……？」

「江戸川君！無事なのね？」

「ああ、何とか大丈夫だよ……手足を縛られてるけど……」

「あなた今、どうしているの？」

「どうかの家の1室……連れて来られた時に田隠しされてたみたいで、どうの町かはわからないんだ……」

「どうやら小娘とこのガキは親しいようだな。よし小娘、オマエが身代金を持って来い。」

「私が？」

「そうだ。」

「上等よ。持つて行つてあげようじゃない。」

哀の返事に、小五郎達は驚いた。

「ダ、ダメだよ灰原！オマエを危険な目に遭わせるワケにはいかない！頼むから来ないで！！」

「うぬせいやツだな。オミクロンー！」

オミクロンという四角メガネの大男が近づいて来て、コナンを抱え込み口を手で塞いだ。

「うへつ、うへつ……」

「え、江戸川君……あなた達、彼に何を！？」

「安心しゆ、部下が少し口を手で塞いだだけだ。」

「言つておけば、彼に手を出したら許せないわよ。」

「フン、安心しゆ。手荒な事はしない。場所については後ほどかけ  
る電話で言おう。いいか、警察には知らせるなよ。」

カパネはそう言つて、電話を切つた。

「オミクロン、ソイシの口を塞いで地下室に運んでおけ。」

「わかりました。」

オミクロンは「ナンの口にガムテープを貼ると、彼を背中に抱えた。

「んん～・・・」

「ナンは力なくもがきながら、運ばれて行つた。

「で、これからどうする？おじさん。」

「相手は警察に電話するなと言つていたが・・・」

「毛利さん、警察に知らせるのは止めましょ。」「ナン君の安全を

最優先に考えれば・・・

「やうだな。哀君、氣をつけるんだぞ。」

「はい。わかつてます。」

哀は強氣で言つた。

「（上藤君、私が必ず助け出すから安心して待つててね・・・）」

哀はコナン救出を強く決意した。

その頃、コナンは一軒家の地下室に監禁されていた。

コナンは柱に縛りつけられている。

「んつ、んつ・・・」

コナンは繩を解こうと懸命にもがくが、所詮子供の力ではピクともしない。

「うう・・・」

コナンは俯いた。

「んんう・・・（情けないよ・・・一度捕まえたイタリアの強盗団に、こんなにも簡単に拉致されちゃうなんて・・・助けて欲しいけど、灰原には来て欲しくない・・・アイツには、迷惑をかけたくない

いから・・・」

その時、ドアが開いてカバネ達がやって来た。

ガチャ！

コシコシ・・・

「ボウヤ、おとなしくしているか？」

「ナンは静かに頷いた。<sup>うなず</sup>

「あの女の子は身代金を持つて来てくれるようだが、果たして持つて来た時に君はここにいるのかな？」

「んつ、んんつー？（ビ、ビツコツ事ーー？）」

「実はね、私達が母国に帰る時には君も連れ帰らうと思つてゐる。なぜだと思つかね？」

「ボスはな、今ある事業に手を出していくのだ。」

「その事業とは・・・人販買だ。」

「んんつー？（何だつてー？）」

「オレ達イタリアの強盗団がかつて奪つたメイプルリーフ金貨15000枚は、オマエ達少年探偵団にやられたせいで全部失つた。」

「あの後オレ達は表向きは模範囚として振る舞いながら、オマエ達

に復讐する機会を伺つて いたんだよ。」

「アタシはこの人達が逮捕された当時、カパネの愛人だった。私もボウヤには恨みを抱いていたのよ。」

「私は半年前に保釈された後、復讐のために資金を稼いでいた。その一環として、人身売買を始めたのだよ。そして、保釈されたこの3人とイタリアで合流し計画を念入りに練つた。もう資金も充分集まつた。私達は先日来日してから少し君の事を調べた。君がどこに住んでいるのかも、どの小学校に通つているのかも。そうして、この計画は実行されたのだ。ここまで聞かされれば、自分がどうなるかもわかるだろ?」

「（人身売買の・・・商品・・・）」

「気づいたようだな。その通りだ。」

「オマエは人身売買の商品になるのだ。オレ達のためにな。」

「（や、やつぱり・・・）」

コナンはガタガタと震えた。

「そう怖がるなよ。不自由はさせないからだ。」

「まあ、明後日になるまでに覚悟を決めておく事ね。」

「ハツハツハツ・・・」

カパネ達は笑いながら、地下室から出て行つた。

「（イヤ、イヤだ……イヤだよ、売られたやつなんて……）」

コナンの脳裏に、哀の顔が浮かんだ。

「（灰原、助けて……助けてつ……）」

コナンは必死にもがいていた。

「（ぐ、工藤君……）」

帝丹小学校で3時間目の授業を受けていた哀は、妙な違和感を感じていた。

「（やつれ、工藤君の声が聞こえた気がする……何かしら、この感じ……まるで、工藤君に何かの危機が迫っているような……）」

「

「どうしたの、哀ちゃん？」

哀の隣の席にいた歩美が、哀の方を向き小声で言った。

「吉田さん、学校が終わったら田舎君と小嶋君も連れて博士の家に来てー何だかイヤな予感がするの……」

「うん、わかった……」

歩美は、短く返事した。

学校が終わった後、歩美達は哀について阿笠邸にやって来ていた。

「哀ちゃん、何について調べるの？」

「あなた達、前に江戸川君と一緒に犯罪グループを捕まえた事あるんでしょ？」

「ええ。」

「それ、何で名前のグループだった？」

「えっと、確かイタリアの強盗団っていう悪い3人組だったよ。」

「イタリアの強盗団ね・・・検索をかけてみましょうか。」

哀はノートパソコンを開くと、キーワードを打ち込み検索を始めた。

すると、何件か検索結果が出た。

哀はその一つに目がいく。

「ディノ・カパネ？この人誰なのかしら？」

「そういえば、あの丸メガネの日本人が言つてたな。自分達のボスだつてよ。」

「那人、あなた達とは会ったの？」

「ううん、奪つた金貨持つたまま日本に逃げて来て、あの3人に捕まつて警察に突き出されたってあの人人が言つてたよ?」

「え・・・」

歩美の言葉に、哀は少し顔をしかめた。

「少しこれに接続してみましょ。」

哀は項目をクリックした。

「え・・・! ?」

表示された内容に、哀は驚愕した。

「どうしたんです、灰原さん?」

「3人共、見て!」

歩美達はパソコンの側に寄つた。

そこには、力パネの事について少しニュースがあつた。

『イタリアで最近、人身売買組織が頻繁に活動を行つてゐる。イタリア警察はこの組織に、イタリアの強盗団のボスであるティノ・力パネが関与している可能性があると踏んで捜査しているが、まだハツキリとした証拠はつかめていない・・・』

哀はその記事を読み、顔が真つ青になつた。

「田谷君、もしイタリアの強盗団の面々があなた達に恨みを持つて  
いるとしたら、何をしようとするか考えられる?」

「え?そりや、ボク達を精神的に追い詰めようとするんじゃないで  
しょうか・・・ハツ!という事は・・・」

「そう、もし彼らが脱獄したか保釈されるかしていふとしたら、真  
っ先に狙うのはあなた達の誰かだと思わない?」

「じゃあ、コナン君を誘拐したのは・・・」

「ええ、おそれらの連中でしょ?」

「あの3人がコナン君を・・・」

「毛利のオッサンに知らせるか?」

「待つて!ちょうど電話がかかってきたみたいよ。」

哀は携帯電話に出た。

「はー、もしもし?」

「さつきのお嬢ちゃんか。私だ、カパネだ。」

「一つ聞いて良いかしら?あなた達、もしかしてイタリアの強盗団  
?」

哀が聞くと、カパネは不敵に笑いながら言つた。

「よくわかったな、お嬢ちゃん。その通りだよ。」

「やつぱりそうだったのね。今度は何の用?」

「フフフ、いよいよ金を持つて行く場所を言つてやるつ。明後日の午後4時、杯戸港の6番倉庫に身代金を持って来い。何度も言つようだが、警察には知らせるな。」

「安心して、絶対に知らせないわ。それより、江戸川君は無事なの?」

「ああ、今はグッスリと眠つている。いいか、くれぐれも妙なマネはするなよ。」

カパネはさう言つて、電話を切つた。

「吉田さん、おじさんを呼んで来て!」

歩美は、小五郎を呼びに行つた。

ほどなく、歩美が小五郎を連れて戻つて來た。

「犯人から電話があつたのか、哀君!」

「はい、やはり江戸川君を誘拐したのはイタリアの強盗団でした。」

「そうだつたか・・・」

小五郎は顔をしかめた。

「犯人の正体がわかつた以上、早くコナンを救出しなければ……」

「コナン君……」

歩美は泣きそうな顔をしていた。

そんな歩美に、哀は優しくこう言つた。

「大丈夫よ、吉田さん。彼は必ず私が助け出すわ。」

哀の言葉に、歩美は笑顔を取り戻した。

「哀君、オレから2つ頼みがある。1つ目。必ずコナンを救い出してくれ。」

「わかりました。」

「2つ目。絶対に……ムチャはしないでくれ。」

「はい、わかつています。」

哀は強く返事をした。

「（工藤君、待っていて……）」

哀はコナンの追跡メガネを手に取り、スイッチを押した。

ピッ！

「（今工藤君は、）この場所にいるようですね。」

哀は無言でスイッチを切った。

その頃、コナンは・・・

「ん・・・」

コナンはまづすらと目を開けた。

「ん・・・（まだ地下室の中か・・・）」

コナンが辺りを見回していると、カパネ達が地下室に入つて來た。

ガチャ！

「ボウヤ、おとなしくしてたか？」

カパネがコナンに尋ねる。

コナンは黙つて首を縦に振つた。

「デルタ、シグマ、オミクロン、ファイ。オマエ達は私が指定した倉庫に行け。相手がガキだからといって油断するなよ。」

「わかりました。」

デルタ達は地下室を出て行った。

「ん、んんっ！…」

コナンはもがいている。

何か言いたそうだ。

「何だ、ボウヤ？」

カパネはコナンに近づくと、口に貼られているガムテープをはがした。

ピリリ！

「おじさん、あの人達に杯戸港に行けつて言つたけど、何でおじさんだけ残つたの？」

コナンはカパネに聞いた。

「フフフ、その事か。実はな、デルタ達はオトリなのだよ。」

「オ、オトリ！？」

「その通りだ。ヤツらが杯戸港での子引きついでいる間に、君を別の場所に連れて行くのだ。」

「ええ…！」

「ナンは驚いた。

「米花港から君を船に乗せ、イタリアへと連れ帰る。そして、後ほどヤツらと合流するのさ。」

「そんな・・・」

「悪いな、これが君の運命なのだ。」

カパネはクククと笑つた。

「何でヤツなの、おじさんは！卑怯だよ、そんなやり方で！..」

「うぬせこな、ボウヤは。少し眠つていもれりね。」

そう言つと、カパネはハンカチに麻酔薬を染み込ませると、コナンに近づいて来た。

「や、止め・・・うつ！..」

カパネはコナンの口をハンカチで覆つた。

「うつ！..」

コナンはジタバタともがいたが、やがて目がトロロンとなつていつた。

「うつ・..」

コナンはガクッとなつた。

「今之内にせいぜい良い夢を見てくれんだな……ハッハッハッ！」

カパネは不敵に笑うと、コナンの口にガムテープを貼り、コナンを縛りつけている縄を解いた。

そして、その縄でコナンの体を改めて縛り上げた。

ギュッギュッ！

「フッフッフッ・・・」

カパネはコナンを背中に背負つた。

そのまま、コナンを庇ひかへと運んで行つた。

翌朝、哀は追跡メガネのスイッチを入れた。

「あら？ バッジの反応が昨日とちがう……（まさか……）」

哀は考え込んだ。

「（なるほど……それが狙いつて事ね……）」

哀はクスッと笑うと、歩美達を呼び寄せた。

「みんな、ちょっと来て。」

「なあに、哀ちゃん？」

歩美達が哀の元に集まつた。

「あのね、『一一四、一二四・・・』

哀は歩美達に作戦を伝えた。

杯戸港 6番倉庫

デルタ達は、6番倉庫で哀が身代金を持って来るのを待っていた。

「フフフ、持つて来た時があの子の最後だ・・・」

デルタ達は不敵に笑っていた。

しばらくして、哀の声が聞こえてきた。

「持つて來たよ、おじさん！」

「わかつた。今開けよ。」

デルタ達は声を哀だとと思い込み、安心して扉をのカギを開けた。

ガチッ！

そして、扉が開いた。

ガラツ！

開いた先に立っていたのは・・・

「ホントだ、哀ちゃんの言った通りだったわ。」

帽子をかぶっている歩美と、彼女と一緒に来た元太と光彦だった。

「オ、オマエらは、あの時の・・・」

「あの女のことはどうしたのよー?..」

「哀ちゃんなら、別の場所に行ってるわ。」

歩美は笑った。

「よくもだましやがったなあーーー！」

デルタ達は歩美達に襲いかからうとした。

その時・・・

「確保だあーーー！」

「う、うわあああーーー！」

田畠の大声と共に、渉や美和子ら刑事達が踏み込んで來た。

デルタ達はなすすべもなく、刑事達に取り押さえられた。

「ク、クソオ・・・」

デルタ達4人は、手錠をかけられた。

ガシャン！

「がんばってよ、哀ちゃん・・・」

歩美は、静かに呟いた。

同時刻、米花港

米花港に、イタリアの強盗団のボス・カパネは車で来ていた。

「フフフ、ここまでうまくいくとはな・・・」

カパネは車のトランクに近づくと、トランクのフタを開けた。

ギィイ・・・

トランクの中には、手足を縛られたコナンがいた。

コナンは田を覚ました。

「一。」

「お田覚めか、ボウヤ。」

カパネはコナンに話しかけた。

「ん~、ん~・・・」

コナンはもがいている。

「デルタ達から連絡がきていないので気にかかるが、まあ良い。私の目的は達成できるのだからな。」

そう言つと、カパネはトランクからコナンを出し、抱きかかえた。

「さて、船に積み込むとするか・・・」

カパネは港に停めた船に向かつて歩き始めた。

「（）と（）と（）連れて行かれちゃうんだ・・・今までありがとう、みんな・・・ちよなら・・・）」

コナンは泣きそうな顔をしている。

「フフフ・・・ハツハツハツ・・・」

カパネが勝利を確信し不敵に笑った、その時だった。

「そこまでよーーー！」

1人の女の子の声が聞こえてきたのは。

「だ、誰だー？」

「？」

カパネは声のした方を振り向いた。

「やつと追いついたわ・・・」

そこにいたのは、哀だつた。

「返してもううわよ、江戸川君をー。」

「（は、灰原・・・）」

「チツ、電話の嬢ちゃんか・・・なぜここがわかつた？」

「江戸川君は、発信器がついたバッジを持つてるのよ。そしてこの追跡メガネを使って、居場所を突き止めたってワケ。」

哀はメガネを外すと、キヨロットスカートのポケットに入れた。

「さあ、誘拐犯さんの成敗とこきましょうか？」

哀はカパネをにらみつけた。

「ナメるな、小娘！！」

カパネは「ナンを地面に降ろすと、拳銃を取り出した。

そして、哀に向けて発砲する。

パシユ、パシユ！

しかし、哀は軽快にそれを避けた。

「なぜだ・・・なぜ当たらんのだ！！」

カパネは叫ぶ。

「当たり前でしょ？自分の事しか考えていないあなた達みたいな連中に、江戸川君を大切に思う私が負けるハズないのよ！」

そう言つと、哀は時計型麻酔銃をかまえ、カパネに向けて発射した。

パシユ！

プス！

「ぐ・・・」

カパネはうめくと、地面に倒れ込んだ。

ドサツ・・・

「江戸川君！」

哀はコナンに駆け寄ると、口のガムテープをはがした。

ピリッ！

「灰原・・・」

哀は「ナンの背後に回ると、縄をほどきにかかった。

「大丈夫? 今外してあげるからね。」

そう言いながら、哀は「ナンを拘束から解放した。

30分後田暮警部達が到着し、カバネ達は連行された。

「ナンは蘭達に囲まれている。

「無事で良かつたわ、「ナン君。」

「ああ、帰るぞ「ナン。」

蘭と小五郎が「ナンに言つたが、「ナンは動こうとしない。

「どうしたの?「ナン君。」

蘭は「ナンに聞く。

「ナンは静かに口を開いた。

「蘭姉ちゃんもみんなも、どうしてボクに話しかけられるの?」

「え?」

蘭達はその言葉の意味がわからなかつた。

「どういふ意味だ？」

小五郎が疑問を口にする。

「だつてボク、灰原が来るのが後少しでも遅かつたらイタリアに連れて行かれてたんだよ？ そうなつたらきっと、ボクはあの人達に汚されてたと思う。もしそうなつていたら、蘭姉ちゃん達はきっとボクを突き放す・・・そう思つてたんだ。」

コナンの言葉を、蘭達は黙つて聞いている。

「ねえ、蘭姉ちゃん達？ もしボクが強盗団達の手によつて汚されて、光を失つても・・・みんなはボクを暖かく迎え入れてくれるの？」

コナンの声は、ヒドく弱々しい。

哀はいてもたつてもいられないといふ態度を見せる。

そして、次の瞬間・・・

哀はコナンを抱き締めていた。

「は、灰原・・・？」

コナンは驚いている。

哀は静かに言い始めた。

「大丈夫よ、江戸川君・・・たとえあなたがどんな事になつても、

私達はあなたを受け入れるから・・・だから、心配しないで・・・

哀の言葉に、コナンは瞳が潤んだ。

「ありがと、灰原・・・あのさ、灰原・・・？」

「なあに？ 江戸川君。」

「実はオレ、前からオマエの事が好きだつたんだ・・・つき合つてくれるかな？」

哀はコナンの告白に笑顔で答えた。

「ええ、喜んで。これからもコロシクね、江戸川く・・・コナン君。」

「うわわわわ、コロシク・・・灰原・・・哀ちゃん。」

コナンと哀は、蘭達の前で抱き合つた。

こうして、コナンを恐怖のどん底に叩き落としたイタリア強盗団の事件は幕を閉じた。

余談だが、その日からコナンと哀が仲良く手をつないで歩いていた事は言つまでもない・・・

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1465e/>

---

イタリアからの復讐者

2010年10月10日04時12分発行